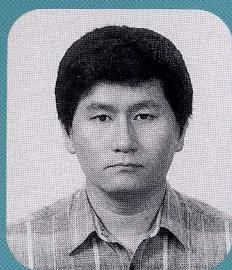


父親の遺言

社会科学研究科
国際社会論専攻 博士課程後期一年

呉 東龍



私は台湾で生まれ、東京学芸大学、東京外国语大学で勉学のち、平成五年三月に金沢大学大学院文学研究科修士課程を修了し、四月に広島へ参りました。

プロフィール

僕の父親は日本の東京の品川工業高等學校に留学した後、日本軍に徴兵され、転々中国の海南島の三毛亜、シンガポールまで戦争しに行った。戦後は負傷兵として台湾へ帰還した。北京語のできない（福建語へ中国の南方系の言葉）と日本語しかできない）父親の公職はもちろん無理であつて、暫く家でのんびりした生活をしていたらしく。しかし、子供を養うために自分の得意とはしない商いの仕事をしなくてはならなくなつた。僕が中学生の頃、ある日、父親に「大きくなつたら、日本へ留学して、博士の学位を取つて來い！」と言われた。その頃の僕は勉強が大嫌いで、中学を卒業すればいいと思っていたが、運がついていたのか、大学まで進学した。大学卒業後、自動車会社の一般技師からエンジニアになつた。会社の海外研修中に、徒步横断中の父親が交通事故で亡くなつた。僕が帰国するまでずっと閉じなかつた父親の目は（家族とお坊さんには何度も閉じよ

うとして閉じられなかつた）僕が軽く触るだけで安らかに閉じたことは僕の心に深く刻まれた。その後、会社の仕事を辞め、三十を過ぎて、日本語の五母音さえ知らない留学生活を始めた。それは「大きくなつたら、日本へ留学して、博士の学位を取つて來い！」という父親の声が耳際で響いたからである。広島大学大学院の合格通知が来たあとで、ある金沢大学の先生に「君は泉鏡花の勉強で広島へ何しに行くのですか？」と聞かれた。その時初めてこれから広島で生活するのを実感した。歴史と地理的に原爆のことしか知らない廣島に行く目的は一つ、「泉鏡花小説」と「中国近代小説」との橋の役目を持つ比較文学である。今まで、鏡花小説を翻訳し続けて来て、言語文化の違いで、うまく解釈できない点はなるべく原作に忠実に翻訳すると言つてきたが、実質的に感じたのは、日本文化に対しての知識の貧しさと両文化の異同の認識が足りないということである。「偏見

を持たずに両文学の正しい比較方法を身につけるには広島大学が適当な学校ではないか？」広島大学の社会科学研究科には中国文学、日本文学、比較文学等の先生がいらっしゃる、それらをまとめて一つの枠で研究出来る。わが夢を果たすために広島にやつて来たのは当然なことと思う。今まで応援して戴いた金沢市民と同じように、これから三年間広島の方々との付き合いはきっととうまくいくけると思う。いつか、広島大学での研究成果と博士学位記を故郷に持つて帰つて、父親の遺言に応えるのが僕の夢である。



江田島・旧海軍兵学校にて